

521

特240

884

齋藤問題の政治性

— 提出者 外交調査會幹事稿本 —

(外交調査會及び常任中央執行委員會に於いて修正せらるゝことあるべし)

代以
謄印
寫刷



始



特 240
884



一、序

第七十五議會再開劈頭齋藤隆夫は民政黨を代表し政府の一般施政方針に對する質疑を爲した。彼はこの質問演説に於いて、今次聖戰を否定し、更に日本の民族的大理想を根本的に否定して衆議院より除名處分を受くるに至つた。齋藤隆夫の演説全體をこゝに紹介するを得ないが、彼の議會に於ける所論は

「八絃十宇」東洋永遠の平和」の民族的理想を明確に否定し、これを以つて空想又は偽善なりとなし、日清戰爭をやつても、日露戰爭をやつても、東亞永遠の平和は實現されず、今次支那事變も、亦、全く空想を追ふ無意義なる戰爭であつて、斯くの如き戰爭の目的を國民は理解せずと斷じ、國家間の競争の眞髓は凡て優勝劣敗であり、弱肉強食であり、強者が弱者を征服し侵略することなりと爲し、支那事變に對し弱肉強食の征服主義を以つて臨む可しと主張し、然らざれば國民的犠牲は無益なり

と論じたのである。支那事變勃發直後、畏れ多くも 天皇陛下は、第七十二議會の開院式に際し勅語を賜り、勅語の中に左の如く仰せ出だされた。

帝國と中華民國との提携協力に依り東亞の安定を確保し以て共榮の實を擧ぐるは是れ朕が夙夜軫念措かざる所なり。中華民國深く帝國の眞意を解せず、濫に事を構へ遂に今次の事態を見るに至る。朕之を憾とす。今や朕が軍人は百艱を排して其の忠勇を致しつゝあり。是れ一に中華民國の反省を促し、速に東亞の平和を確立せんとするに外ならず。朕は帝國臣民が今日の時局に鑑み、忠誠公に奉じ、和協心を一にし、贊襄以て所期の目的を達せんことを望む

また第七十四議會開會に當りては、

帝國と締盟各國との交際は益々親厚を加ふ朕深く之を欣ぶ

朕が將兵は克く艱難を排して已に支那の要域を裁定したり然れども東亞の新秩序を建設して東亞永遠の安定を確保せんか爲には實に國民精神の昂揚と國家總力の發揮とに俟たざるへからず朕は舉國臣民の忠誠に倚信し所期の目的を達成せむことを期すとの勅語を賜つてゐるのである。

齋藤隆夫の演説は實に勅語を冒瀆し奉るものである。また支那事變を通じ、東亞新秩序の建設は、神武天皇肇國の大精神たる「八紘一宇」の民族的大理想を顯現する第一段階たることは何人もこれを疑ふものはない。然るに齋藤隆夫は、日清戦争をやつても日露戦争をやつても、東洋永遠の

平和は實現されない、従つて「八紘一宇」「東洋永遠の平和」の我が民族的理想を以つて空想又は偽善なりと爲すのである。それは日本國民として許す可らざる妄斷である。彼れによれば、今次支那事變も空想を追ふ無意義なる戦争であつて、斯の如き戦争の目的を國民は理解せずと述べたのであるが事變以來既に滿三ヶ年今次事變の目的が東亞新秩序の建設にあることは日本國民の心底に徹してゐるところである。この今次事變に對する聖斷を仰いで確立せる帝國不動の方針を國民が理解せずと爲すは、日本國民に對する許す可らざる侮辱である。聖戰を冒瀆するも極まれりと云はなければならぬ。かゝる非國民的思想を撲滅することなしには斷じて事變目的は達成し得ないのである。また齋藤の論する如く、戦争の本質を侵略主義と斷定し、支那に對して弱肉強食の征服主義を以つて臨むならば、日清、日露、滿洲事變、更に今次事變を通じて拂はれた皇軍將兵幾十萬の犠牲は全く生きないのである。我が忠勇なる皇軍の將兵は「東洋永遠の平和」と云ふ我が民族的理想實現の爲めに、あらゆる艱苦を乗り越えて、大陸に感激を以つて骨を埋め來つたのであるが、齋藤の云ふ如く戦争が單なる弱肉強食の一修羅場に過ぎずして、道義も理想もないものとすれば、之れは皇軍將兵の尊き精神と辛苦を無にするものであると共に崇高なる幾十萬の英靈の犠牲を泥土に棄捨するものである。齋藤の言論は、更に許す可らざる援蔣行爲である。蔣介石政權が支那の民衆を驅

つて抗日戦争に赴かしてあるところのものは、今回の支那事變を以つて日本の支那に對する侵略なりと爲しつゝあることであつて、齋藤は蔣介石政權の宣傳に裏書を與へたものである。また事變以來日本の行動に對したえざる誹謗を敢てしつゝある英米諸國に絶好の資料を提供したものと云はざるを得ない。齋藤の罪は正に死に價ひするものである。蔣介石は戦線に於いて、或は放送に、或は文書に託して齋藤の演説と殆んど同様のことを宣傳しつゝある、また共産黨も我が國內に向つて齋藤の演説を支持し、我が思想的混亂を企圖しつゝある。近代戦に於ける思想戦が如何に重大であるかは今更論する迄もないのである。前世界大戦に於けるドイツの敗北を省みれば自ら明かである。また今回のヨーロッパ戦線に於いて各交戦國が思想戦を如何に重大に戦ひつゝあるかは今日、我々が日々見聞しつゝあるところである。然るに齋藤問題が議會に於いて、其の處斷に一ヶ月有餘の日子を要し、而かも、除名に對し各派相當多數の反對者を出したことは、そのこと自體我が戦時體制に重大なる暗示を興へたものと云はざるを得ない。我等はかゝる重大なる問題を我黨内に於いて之れを認識せざる分子が存在し、脱黨を賭してあくまで齋藤を擁護せんとせしものを出したことは遺憾の極みであつて、彼等が如何に近衛聲明を支持するも、その實體は事實に於いて戦時體制破壊の罪を犯したるものと云はざるを得ない。政府がこの問題に關し簡單なる釋明を以つて敢て前後

處置を構ぜざるは大失態である。政府も亦この問題の重要性に對し認識を缺くものと云はざるを得ない。民政黨及び政友會内にも相當多數の齋藤除名反對者を出したのであるが、腐敗しきれる既成政黨は之れを默視してゐるのである。我黨の齋藤除名反對分子は之れら既成政黨中の惡質者なる自由主義者どもと何等選ぶところなく國辱の過誤を犯したのである。黨がこれらを處置したことは餘りにも當然である。

一、齋藤演説の要領

齋藤氏は事變處理一段階としての汪新中央政權助長の方途の當否を確かむるの形に於いて否定的意思表示をしたのである。日支國交調整の基本方針を質問するの形に於いて自己の否定的主張を以てこれを批判した。聖戰目的に關し政府幾度の聲明によつて確證せられたる帝國不動の國策と理想を否定した。要するに、何人と雖もこの演説が、聖戰そのこと自體に對し深刻なる懷疑を表白したるものなることを認めざるを得ない。

この儘ならば、一個の自由主義者が容易に一個の帝國主義者に顛落し得ることを表明したに止まる。だが、同氏は更に進んでその歴史哲學を展開した。一個の合理主義者が、その觀念的合理の世

六
界から逸脱して彼のいはゆる非合理の世界に陥没したとき、合理と非合理を包摂する宇宙の擲理の
方則性に對する一個のニヒリストたることを明かにしたのである。即ち、その演説は國民の戦争犠
牲を高調しつゝ、今次事變が理念的には全く無意義なることを結論づけることによつて、今次事變
に於ける犠牲の民族的精神的價値を否定せんとしたことである。しかも、これが議會の第一黨たる
民政黨の代表演説として爲され、同氏が離黨したる後に於いても、議會の中に於いて、不言不語の
間に相當の共鳴者を呼んでゐる事實が、本問題をして議場一個の言論の問題にあらずして、我が國
現下の最も重要な政治問題たらしむるのである。

三、議會言論の自由より考案

不幸にして、我等の會つての同志の中に於いては、議會言論の自由の觀點より、心中同氏の演説
を支持し、表面その演説を否定しつつも同氏の除名に反對し、黨議決定の後に於いても、除名投票
に意識的且つ集團的に黨の議會政治行動をサポートージュする者を生ずるに至つたのは遺憾である。
かゝることが、黨規の上より將たまた黨の政治行動の統一性と効果性の上より許すべからざるもの
なることはこゝに再論をしない。併しながら、その思想に横たはる議會言論の自由に關してはこゝ

にその誤謬を指摘せねばならぬ。

(イ)

議會は國民の感情と言論をそのまま素朴に表現するものである、これ議會が國民輿論の府と云は
るゝ所以である、と議論するものがある。國民の個々の素朴なる言論と感情をそのまま、即ち、素
材原料のまま、議會に持出すことは政黨の否定である。國民の個々の感情と言論は原料であり素材で
ある。これを建設的に體系づけることが政策なのである。政黨はこの政策によつて大衆の感情と言
論を綜合し、これによつて、議會に於いて政府及び他の政黨と戦ふのである。かくして議會が存立
し得るのである。たゞ漫然國民の個々の言論と感情の素材原料を投げ合ふのでは議會議事は進行し
ないのである。若しも論者の如しとせば社會大衆黨は成立しなかつたであらう。社會大衆黨立黨の
當時、大衆は理念に於いて資本主義を肯定し、個々の感情に於いてこれに反撥を示してゐたに過ぎ
ない。かゝる大衆の上に宣傳と教育を通じ、我が黨の政綱政策の體系を植付けたのである。植付け
ることによつて支持もされたのである。國民個々の感情の素材をそのまま取扱ふことは自由主義に
於いても許されざるところである。

(ロ)

或ひは更に、齋藤君の演説は事變處理と聖戰目的に對する一系の論理を展開したと爲す者があ
る。それは、言論を交換する場合に於いて一つの確乎たる原則のあることを忘れてゐると云はねば
ならない。東京驛に於いて熱海に行くべきや箱根に行くべきやを論争するのはいゝ。熱海の宿屋に
衣を脱いでから明日伊東に廻るべきや箱根に戻るべきやを論じても一向差支はない。けれども、衆
議一決熱海に向つて行きつゝある時、汽車すでに小田原驛を過ぎた時に箱根に引返すことを論ずる
ことは許されないのである。これは、言論を交換する協同生活體に於ける當然の秩序である。一た
び論議決定せられたるものは再び取上げることが得ない。これを一事不再議と云ふ。言論を交換す
る協同生活體に於いて恣意の放言を自由と解するならば自由とは野蠻の異名に外ならない。而して
國家は、特に戰時下に於いては高度なる言論の協同生活體である。現下時局に於ける言論の自由
は、一つの現實を議論の對立、即ち勢力の分散によつて自ら破壊することではない。一つの現實か
ら次に如何なる現實を創造すべきやの點に言論の自由がある。一つの確定せる現實目標に向つて國
家が邁進しつゝある場合に、議論の對立によつてその步調を混亂せしむることは言論の自由ではな
い。その現實目標が一たび達成せられたる後に、次に如何なる現實目標に向つて行くべきやを論ず
ることが言論の自由である。蓋し、一國の生命的發展とその行動は繼續性を有しなければならぬ。

そのコースに於いては辯證法的なる發展、即ち展開と揚棄が出て來ても差支はない。その性格の繼
續性は斷じて動搖を見せなければならないものである。國民の犠牲を革新に推進することが政治であつ
て、犠牲を唯物的にのみ計量し、犠牲の意義を崩壊せしむることは斷じて非國家的である。

(八)

除名せられたる諸君は、以上の諸點につき民主主義的論理の粉飾を用ひたが、多數決によつて黨
議が決定したる後、これに従ふのは常に團體生活原理たるのみならず、民主主義の基本であるに拘
らず、黨議に反しその個人の傾向(彼等は信念と稱するが)を恣に貫徹したることは民主主義の精
神、論理にも反する。即ち、自ら個人主義の功利的貫徹の哲學に生きることを明瞭にした。我が黨
立黨以來、その政綱政策は時によつての發展はあるが、未だ曾つて功利的個人主義者を黨内に容認
し得る建前をとつたことはない。

四、齋藤氏の演説の時代不認識性

資本主義自由經濟の紐帶が、それ自體の矛盾によつて各國家を調整し得なくなつてから、自由主
義による世界秩序が崩壊し、民族社會としての各國家の鬭争期に入つたことは周知の如くである。

併しながら、この民族闘争は單なる弱肉強食の闘争ではない。フランス革命に見るが如く、アメリカ南北戦争に見るが如く、舊世界の理念の桎梏を打破つて新らしき理念を創造し、以て新らしき世界の歴史を開くものゝみが勝利者としての指導民族である。従つて現在の民族闘争は人類史に新らしき頁を開くための文化の進歩への闘争である。而してその闘争の形態は、指導者としての民族社會が他の近接民族を誘掖指導してその協同經濟の生活圏を擴大し、自由主義世界の影響から離れ國民に安定向上的なる生活を與へんとする保境安民の生活圏確保の闘争となつてゐる。この安定せる生活圏の擴大なくして資本主義世界舊秩序から新らしき世界秩序を生み出す力の據所、即ち城塞がないのである。かくして東亞協同體の理念の下に建設の理想に向つて聖戦が行はれつゝあるのである。忘れてならないことは、日本が日滿支蒙の協同體を造ることに失敗すれば、滿蒙支は他の指導者民族に率ひらるゝ生活圏に編入せらるゝ危険のあることである。今や列強の領土單位は擴大しつゝある。若しも我が國が日滿支蒙の協同體を建設することに失敗すれば、我が國は朝鮮海峽以東に領土を持つ世界六流國家に顛落し、歐洲、中南米の小中立國の如く日夜その存立を危惧しなければならぬ地位に陥るであらう。今次事變が我が國の存亡を賭すと云ふも敢て過言に非ざる所以もこゝにある。この事實を認識せざる者が我が國朝野に存するに拘らず、列強が悉くこの事實を認識して

ゐるところに現在の日本の危機があるのだ。従つて、現代の日本の危機は次の二要素に分析せらるゝ。

一は我が國の政治經濟が未だ舊秩序に獅嚙みついてゐるに拘らず、歐米部面に於いてはそれ〴〵舊世界から一步乃至二歩進まんとしてゐることである。即ちこの點から觀るならば、我が國の危機は我が國の後進性から發する我が國綜合文化力の危機である。これは危機であると同時に歐米の部面に於いてその文化危機を脱皮せざるうちに、我が民族の創造力が日本の世界觀の下に新らしき世界史の理念を創造し、これを實行する實力を持ち、その如くに我が民族の政治力が集結するならば飛躍への危機である。従つて、現段階は日本の運命の岐路であると共に、また世界の運命の岐路でもある。だから齋藤氏演説を論ずるが如きは二の次なのである。

吾人が何よりも認識しなければならぬことは、武力的に經濟的に政治的に思想的に我が國を大陸の把握から切離さんとする意圖の下に、世界の他の指導者的國家が動いてゐることの一點も疑ひなき事實である。かゝる觀點から日本を大陸から切離さんとする諸國の日本武力、政治、經濟、思想の分析の上に立つ戰略は是を次の如く集約される。

1 日本戰爭經濟は過去の蓄積を消耗する舊時代的戰爭觀の下に遂行せられてゐるから消耗し終

るまで消耗せしめよ、かくして日本戦時経済は破綻する。

2 戦時経済の破綻と共に、日本自由主義経済の性格は都市、農村、國民各階層間の相剋が發展するから民族政治力の集結が分散し、政治指導力が喪失して来る。

3 國民はその生活的痛苦から戦争を批判すると共に、大陸政策は元來軍部の強硬政策で國民の支持せざるところであるから大陸政策の實行力を喪失するであらう。

4 この見地に立つと敵性國家としてのソ聯邦は、日本に共產主義革命の來らんことを希望し、英佛米は自由主義的政治力の復活を希望してゐる。

要するに彼等は、日本現下の政治形態を歐洲大戰末期の獨逸に酷似せりとなし、日本は今や共產主義か自由主義かワイマールへの道を歩みつゝありと考へ、これに沿つてその多角的な戦略を展開しつゝあるのである。歐洲大戰末期に當り獨逸社會民主黨の代議士フェルチナンド・クツスナーが帝國議會に於いて、政府及び軍部の戦争指導に對する反對的批判を試み、獨逸の民衆は心の中でこれに拍手した。この時、參謀本部に在りしオットー・パウエルは獨逸の戦争態勢こゝに破れたり、敗戦必至と看做してスイツルに走りレーニン、トロツキーを獨逸を通過してロシヤに送りロシヤ革命を成就せしめて、獨ソの間にプレストリトフスクの條約を結んだ。かくて背面のロシヤを安定せ

しむると同時に共產黨を通じフランスに大争議を起さしめフランスの正面戦線は將に潰えんとした。同時にイギリスの商船隊は悉く撃沈せられ同國の食糧危機は將に講和を申出ん前夜に迫つた。然るにこの時、社會民主黨、自由主義政黨の反噬は遂に獨逸労働大衆を驅つて總罷業に赴かしめ獨逸帝國はこゝに潰滅したのである。

従つて、我が國敵性國家が齋藤氏の演説を以てフェルチナンド・クツスナーの演説に比すべきことは極めて當然であつて、たゞ彼等は、日本民族が犠牲の骨血の中に立つて危機を勝利に導くところの國體的歴史的民族精神を知らないのみである。齋藤演説は日本敗北主義の宣言である。これと戦ふことは、民族大衆の光榮を目掛けて旗を掲げてゐる我が黨の使命であることを知らねばならぬ。

五、齋藤氏演説の影響

以上の如き基本的戦略に基き、我が國を大陸より引離さんとする敵性國家が齋藤氏の演説をいかに利用したかは論ずるまでもない。

重慶軍が戦線に配布したところのものは『改造』一月號の『米の座談會』の記事であつて、日本が如何に食糧危機に襲はれつゝあるか、と云ふことを以て前線を鼓舞してゐる。更に歪曲せる齋

藤演説を以て日本政治態勢の混亂を混亂となし、同じく好戦精神を煽動してゐる。獨伊の論調はこれを默殺してゐるが、兩國共最近の日英接近の諸傾向と共に内心新秩序建設に於ける日本の實力を危惧し出してゐる。ソ聯邦は直接齋藤事件に言及はしないが、暗黙に日本戦時體制の戦時思想體制の混亂を指摘したる上、支那の共產化と滿鮮内蒙に對する馬蹄型包圍陣の完成が日支事變前、即ち昭和七年支那共産軍西北移駐の時より、日支事變に拘らず更に強化したることを誇示してゐる。獨逸は特に最近の日本政治情勢に對し反感を増すと共に、獨ソが共同して太平洋方面に歐洲戦争の展開と併行して、重大なる發言權を持つべき諒解と用意ありとの確實なる情報がある。英米に於いては、齋藤演説を以て『デスベレート』、即ち國民の絶望感の表白なりとし、現在のところ英米の確乎たる話合には至らないやうであるが、米國は東亞新秩序と汪政權否認のために、九ヶ國條約の加盟國會議を招集することは確實化するものゝ如くである。英國は米國をして對日强硬態度を執らせつゝ、英國自身としては日本との妥協によつて支那北支、蒙疆等の日本勢力圏、山西、陝西、甘肅、新疆以外の全支に於ける英國の現有地歩を確守し得る希望を抱えてゐるが如くである。かゝる情勢に立つてウォルター・リツプマンが、米國の現國務省の對日强硬外交を非難しつゝ、一方支那に於ける日米提携を説きながら、日本を渤海の東に退却せしむるのは二年の後に可能なりと放言してゐる。

齋藤氏の演説を最大の原因とせざるも最後の原因として、對日敵性國家の對日攻勢は一段と深化した。新秩序と汪新中央政權に對する我が國朝野の實力を疑ふ點に於いて共通なるを遺憾とする。而して、特に齋藤氏の演説を引用せる敵性國家の論調の背後に隠れてゐる思想は、この公の表現を以て、日本が表面上善隣友好、日支互助連環を説きながら、内心に於いては侵略的意圖を表明せるものとする。一方これを以て、支那民衆をして日本及び新政權より奪還することを確信するに至つたと共に、他方九ヶ國條約の招集に當り、日本表面の聲明に拘らず、内實に於いては侵略にして、國民がその侵略を承認したりとの證據に齋藤氏の演説を引用し、以て真正面から支那に於ける新事態を否認する有力なる論據に爲さんとしつゝあることは確實なる見透しであつて、齋藤氏の演説が、昭和六年滿洲事變以來の日本大陸政策に對する外國への裏切たることは極めて明瞭である。

六、結 語

外國は形式を見ないで實質を見る。形式的な學國體制にある日本を恐れずして、古き思想が新らしき思想によつて克服されつゝ、強力なる國民政治力發現の過程にある日本を恐れる。我が黨は齋藤氏の言論に對し堂々議會言論を以て戦はんとしたるに拘らず、多數派政黨の許さざるところとなつ

て問題が懲罰委員會の問題となり、これによつて除名に至つたことも我が黨は甚だ遺憾とするものである。

一方に於いて、國防國家日本がその萬民輔翼の立前に立つ憲政が議會のみを以て足りないこと云ふことも瞭らかになつてゐる。如何なる國家の政治と雖も國民に或る種の不滿の無い國はない。上意下達、下意上達の途を拓くためにこゝに憲政は欽定せられたのである。併しながら、議會で如何に戦はふとも石炭電力は即座には殖えない。國民の要求はより日常生活的なものとなつて來てゐる。國民の要求は、今日その希望を陳べれば明日は政府の對策を知り得、明後日から一つの對策が實施し得るところの日常生活的な憲政があつて、これによつて萬民輔翼の途が拓け、上意下達、下意上達の日本國民の民族の思想と意思の集約がなされなければならない。萬民輔翼の途は四年に一回の投票箱にあらずして日常の生活自體の中にある。即ち、生活の場所に職場に國民自身を代議士とする議會が開かれねばならぬ。これ我が黨の國民組織論である。従つて、國民組織は憲政の補完運動であり、第二の立憲議會開設運動である。

我が黨は常に齋藤氏の演説を鋭く批判しこの種の思想と戦ふのみならずかゝる現象を絶滅し、國民をして安んじて國策に殉じ喜んで協力を確保するところの新しき政治的自由への道を我が國體理

念の下に完成し、危機を轉じて飛躍とするところの國民の政治力を集結する一大巨柱とならんことを覺悟してゐるのである。

片山一派の齋藤問題をめぐる我黨よりの被除名者が『我等は何故離黨を拒否したか』の聲明の中に、黨本部が恰も政友會中島派、時局同志會等と新黨結成の爲め、黨内異分子の清掃を爲したる如く稱してゐるが、これこそ、過去二十年に亘り我黨が國民の再編成、國民組織の確立を主張し來れる黨の現下の大方針を何等理解してゐなかつたことを自ら暴露せるものである。黨本部は彼等が云ふのが如き新黨運動など毛頭考へてゐないのみならず、むしろ彼等の一派こそ昨年我黨が東方會との新黨結成失敗後政友會中島派その他の既成政黨分野諸分子と會合徘徊したものであることを指摘せざるを得ない。我等は別項片山一派の除名問題の本質意義の究明に於いて述べたる如く、今回の問題を通じて、黨はここに完全なる統一體を形成し、黨本來の使命たる國內革新斷行の具體的第一歩たる國民組織の實踐に向つて一大國民運動を強力に展開しなければならぬ。

我黨今年度一般活動方針の中に我黨の進むべき道について左の如く述べてゐる。

我黨は、國民の主力を政治的に結集し、相率ひて時難を克服し東亞新秩序の建設に邁進せんとする理想は片時と雖も忘るるものではない。唯憾むらくは、我黨と理想を同じふし得る勢力のあまり

に寥々たることを。既成政黨の「手」は餘りに汚れてゐる。官僚の意志は之れを諒とするも現實的には屢々大衆の要望と背馳してゐる。我々は最早や彼等の政權をめぐる離合集散に意を勞するの暇を有たぬ。廣く同憂の士を新興革新勢力の間に求め之れが集結を期しつつ一路理想に向つて奮進せんのみ。現下の政治的一大缺陷は、國民と政治とを結ぶ組織の缺如である。政黨待望の聲はあるも現實に之れに應ふ可き政黨なきを如何にせん。國民の奮起を求むる要求は切實なるも國民を動かす組織なきを如何せん。我黨が國民組織の急務を説く所以もここに在る。

と國民組織の必要を力説したのである。而して黨本年度の一般方針を要約して、

- 一、東亞協同體、國民協同體の理念に徹し、國家民人に對し嚮ふところの指示を與ふること。
- 一、資本主義修正の陣營を強化し國內の革新を斷行し、戰時政治組織體制を根本的に改編するこ

と。

- 一、既成政黨の政治勢力とは明確に一線を劃し之れを革新政黨の視野外に置くこと。

- 一、政府提唱の各種國民組織運動に對しては、これを批判すると共にこれに協力し、もつて眞實の國民組織の出現に拍車すること。(以下略)

我々の進むべき道は既に、判然としてゐる。我黨の全勢力を結集して『國民組織』へ奮進するの

みである。昨年二月我々は東方會との合同による革新々黨を結成して、これを國內改革の推進力たらしめんとした。然しそれは既に知らるる如く失敗に終つて結實しなかつた。我々はこの尊き經驗を生かし日本の諸情勢を直視しつゝ、飽迄革新勢力の結集強化に向つて進まなければならぬ。昨年の失敗にこりて萎縮するが如きは斷じて明日の日本を背負つて立つべき我黨の態度ではない。聖戰目的の完遂、東亞新秩序の建設、それは國內革新政治體制の確立に俟たねばならぬ。これを遂行することこそ我黨に課せられたる歴史的使命である。革新的政治勢力の結集、それは如何なる道を進むべきか。

新黨か、國民組織か。

新黨運動にも二つの行き方がある。一つは我々が昨年經驗した革新勢力の第一次的結集を行つてこれを國民組織建設への推進力たらしめんとせるもので、更にその二は最近政友會中島派等において宣傳しつつある院内勢力を二分しての現行狀破的傾向のものを結合し、それ自らが日本の革新に當らんとするものである。

我々は、既に、兩者共新黨運動時代は過ぎたと見るのである。今日に於いては國民組織に直進すべきである。

所謂既成政黨をも含む新黨運動は基本觀念に於いて『國民組織』とは全然一致しない。更に言葉を換れば『新黨運動』を通じては日本の革新は齎し得ないと云ふことである。新黨運動の非革新性は、

第一、院内勢力の糾合であつて、院外勢力を第二義的に置き殆ど省みない點である。院外の廣汎なる革新勢力に目を蔽ふものは斷じて革新を達成せしむるものではない。

第二、新黨運動は議會の解散を通じ、即ち選挙戦を通じて政界分野の更新を計り、現状維持勢力の打倒を企圖してゐる。革新は量的轉換に非ずして質的轉換でなければならぬ。質的轉換なき院内勢力の離合集散によつて、更に解散によつて政界分野を移動せしむることは政權亡者の集結を見ても國內革新へは進まない。

第三、新黨運動の基底を爲すものは、既成の議會主義イデオロギーである。政治と國民との關連を四年に一回の投票と、日常活動として選挙民の就職運動と生き死の贈物と、更に年一回の議會に於ける演説に置くものである。

如斯き議會主義的政治組織こそ今日の我國の政治を半身不隨たらしめてゐる根本原因である。

即ち議會主義政治組織は、國民と政治を機械的に結合したものに過ぎない。それは政治と經濟

とを分離し遊離せしめてゐるからである。政治と經濟との組織を統合し、有機的にし渾然一體的組織たらしめなければ國民と政治の有機的關係は成立しない。國民組織とは今日の政治經濟分野に於ける國民の形式的組織を機械的組織を有機的なる一體的組織に改むることである。戰時體制下、國家統制が強化され益々統制經濟の強力遂行が要求されつゝあるとき、國民的協力が極めて稀薄にあることは、現下の政治組織に萬民輔翼の道が開かれてないことである。四年に一回の選挙投票に國民の要求は具體的に表示され得ない。

國民組織は政治組織と經濟組織を有機的に統合することにあるが、それは既存の經濟的組織を政治組織に直ちに結合せしむることではない。國民組織は、國民の日常不斷の經濟活動及び生活活動の中から諸要求をとりあげると共に政治指導を浸透せしむる組織である。然し今日の産業組合、商業組合、工業組合、或は産業報國會等の經濟組織をそのままの形に於いて、政治組織に結合せしむることは、不可能であると共に意義がないのである。従來の經濟諸組織も議會主義政治組織と共に自由主義イデオロギーに出發したるものであつて、本質的には利己的組織である。之れらは全體主義的な公益組織に改められなければならない。即ち今日の國民の諸組織は再編成されねばならないのである。

398
168

新黨の風聲鶴唳に驚いて、國民組織の本質を何等理解し得ざるものは典型的議會主義者であつて救ふ可らざる徒輩である。

三三

和昭十五年三月二十九日印刷
昭和十五年四月一日發行

非賣品

東京市芝區西久保櫻川町七
編纂發行 龜井貫一郎
及印刷人

終

